

日本細菌学会 関東支部ニュース

第22号

第72回日本細菌学会関東支部総会開催にあたって

第72回日本細菌学会関東支部総会を来る11月10日(木)、11日(金)に支部会最西端の浜松で開催させていただきます。折しも柳原保武教授(静岡県立大・薬・微生物)が文部省より国際交流資金をお受けになり「ライム病(ボレリア感染症)」に関する国際共同研究を実施する年で、本支部総会のサテライト国際シンポジウム(11月12日(土)、同じく遠鉄ホテル・エンパイア)を設定、柳原世話人代表の下、開催の運びとなりました。国際化の時代、支部会の益々の発展を目ざし大変喜ばしいことと島村支部長以下評議員会の先生方も大賛成して下さり、さらに日本細菌学会も共催して下さることになりました。

さて「細菌と生体の分子レベルでの相互関係をさぐり、明日への治療・予防へ」という大テーマの下に総会を開きます。序説に、教育講座を4つ、分子レベルで生物活性の明確な百日咳毒素、コレラ菌毒素;生体側で免疫応答の主役でもあり、スーパー抗原としての毒素が細胞膜上で反応する分子T細胞レセプターと主要組織適合抗原(MHCクラスI, II抗原)を教育シンポジウムとして組みました。

シンポジウム1は現在最も注目を浴びているスーパー抗原としての細菌毒素の病原性を細胞表面の分子との相互反応と捉え、未知の病因・病態の解明に「細菌性スーパー抗原をめぐる基礎と臨床」としました。

シンポジウム2はまだ解明されていない細胞内寄生細菌を取り上げ、宿主との関係を分子レベルで解析し、治療・予防を可能にすることを目的とし「細胞内寄生細菌と生体防御」としました。そのためにサイトカインの第一

総会長 吉田孝人
浜松医科大学教授(微生物学教室)



人者新井賢一教授をシンポジストに参画していただき会員の皆様と大いにご検討していただきます。日本人は今、4人中1人が悪性腫瘍にかかり、難病としての自己免疫病等々が増加し、高齢化が進むことによる易感染宿主の増加が問題になっております。また一方、エイズウイルス感染と日和見感染はアジアの緊急課題の一つであります。

更に、ボレリア感染が世界で問題になり「ライム病」が話題となっている中、国際共同研究で来日なさるN. W. シャロン教授に特別講演“A genetic-structural analysis of Spirochete motility”をサテライト国際シンポジウムに先駆けてお願いしました。微生物の神秘の世界を知るよき機会と期待しています。総会と国際シンポジウムで泊まりながら交流を深め、満喫していただきたいとお待ち申し上げます。多数ご参加下さい。

平成7～9年支部評議員選挙を終えて

選挙管理委員会委員長

河野 恵

次期関東支部評議員選挙のための選挙管理委員会は、五十嵐英夫、池田達夫、島田俊雄、竹田多恵および私によって構成されました。実際の活動は下記によって平成6年6月20日から7月25日に渡りました。

6月20日(月)：有権者名簿に関する異議申し立て締め切り(必着)

6月25日(土)：異議申し立てについての審議

7月1日(金)：訂正部分のみを記した名簿補遺と投票用紙の発送

7月16日(土)：投票締め切り(消印有効)

7月22日(金)：投票用紙の受け取り(学会事務センターより)

7月23日(土)：開票作業と開票結果の支部長への報告

7月25日(月)：当選通知を当選者に発送

今回の選挙では、投票用紙発送総数1,388通(正会員1,352通、学生会員36通)、うち受取り人不明で返送されたもの9通、したがって1,379通が有権者に配布されました。これに対して、総投票数は483通で、投票35.0%でした。開票結果は総投票数のうち、有効投票：467票、白票：2票、無効票：14票という内訳でした。なお、締め切り後に到着した投票はありませんでした。

開票得票の結果では、73名の方が得票し、新井俊彦(明治薬大)、池田達夫(帝京大・医)、伊藤武(東京都立衛生研)、井上松久(北里大・医)、伊豫部志津子(群馬大・医)、内山竹彦(東京女子医大)、梅本俊夫(神奈川歯科大)、大国寿士(日本医大・老人研)、奥田克爾(東京歯科大)、川原一芳(北里研究所)、近藤誠一(城西大・薬)、松浦基博(自治医大)、宿前利郎(東京薬大)、

山本友子(杏林大・医)(以上五十音順)の14氏が当選と決定されました。先生方にはご苦勞をおかけしますが、平成7～9年期の日本細菌学会関東支部評議員としてご活躍下さいますようお願い致します。なお、得票第1位の方は39票を、第14位の方は15票を獲得され、1票だけ獲得された方々は36人にもおよびました。

今回は「日本細菌学会関東支部会則」および「選挙細則」を改訂して2回目の選挙ということで、ほとんどトラブルもなく順調に選挙を終えることができました。今回の投票率35.0%を過去3回の投票率、すなわち平成3年(40.1%)、昭和63年(27.6%)、昭和60年(36.6%)と比較すると、総じてあまり大きな変動はなかったように思われます。今後の関東支部のあり方を考える一資料となるかも知れません。今回当選された14人中新人が8人でした。これは関東支部の活性化に強い関心を示して頂いた会員の皆様のご協力によるものと思っております。本当にありがとうございます。今後とも活発な関東支部に育てていくため、ご協力をお願いいたします。

終わりに、本選挙に当たっては、関東支部幹事の昭和大学医学部戸田真佐子、薬学部江川清の両先生をはじめとして同大学細菌学教室の諸先生に支部事務局として、また、大久保幸枝会員(昭和大学・医)には開票当日の立会人として、大変お世話になりました。ここに厚く御礼申し上げます。

「劇症型溶レン菌感染症の話題」

旭中央病院麻酔科

清水可方

劇症型溶レン菌感染症 (TSLs) はA群溶レン菌感染により突発的なショック, 多臓器不全を合併する敗血症である。本疾患は米国防疫センターの研究者らにより'92年に独立した疾患として認知され, 診断基準案が提示された。我々の施設では最近の2年間に10例のTSLs症例に遭遇しているが, この8例を失っている。自験例を検討すると全例が重篤な病態を呈したが, 臨床所見および病理所見は多彩であり, 本疾患の全貌を把握するためには更に多くの症例の検討が必要である。免疫抑制を来す基礎疾患を有す症例にA群溶レン菌感染を起こすと, 現在でも致命的な敗血症を起こすが, TSLsは特別な合併症を持たぬ者に発病する点が重要である。TSLsの発症機序については不明な点が多い。自験例の分離菌はM3型およびA型発赤毒素産生株が多いが, 3症例は同一菌株により家族内に咽頭炎の集団発病が見られた。これらの所見から特定株の関与は考えられず, 菌および宿主側双方に複数の発病因子が存在すると考えられる。菌側因子として菌莖膜内M蛋白量の増加による菌浸潤性亢進, プロテアーゼ活性について検討が行なわれている。また宿主側の因子として発熱毒素をスーパー抗原として受容する個体や組織, 特にプロテアーゼ親和性を持つコラーゲンのサブタイプについて研究が行なわれている。特に発熱毒素のスーパー抗原作用は黄色ブドウ球菌によるtoxic shock syndrome, エルシニア感染症等の類似病態を呈す他疾患との関連から興味を持たれる。TSLsは'94年5月に英国において「ヒト喰いバクテリア」と称してセンセーショナルに報道されたが, 本邦では最近の10年間に約50例が確認された希な疾患であり, 二次発病も例外的であって, 社会生活上本疾患に罹患する危険性は無視できる。しかし症例数が少ないことが本疾患を研究する障害となっております。疑わしい症例に遭遇されたら御一報を要請します。

「MRSAの現状と今後の研究課題」

千葉大学医学部臨床検査医学

菅野治重

Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* (MRSA)の流行は日本の医療にとって大きな脅威であったが, 1991年末に注射用Vancomycin (VCM)が発売され, 治療的には解決されてきた。1993年度の当院のMRSAの分離症例数は1991年度の約2/3に減少したが, 抗MRSA剤の使用量は, VCMは1/2に, Arbekacin (ABK)は1/5に, 大幅に減少しており, これはMRSAの検出例に対し, 医師がむやみに治療しない様になってきたことによると思われる。この様に大病院ではMRSAパニックは収束に向かっていている。しかしMRSAには未解決の問題も多い。

まず臨床上の問題であるが, VCMは重症例に対する治療効果が思わしくない。この理由として, VCMは投与開始日における血清中濃度が低い, 効果が静菌的である, などの問題があり, これが治療効果に反映した結果と考えられる。このためVCMの投与初期の治療効果を高める研究が必要であり, 併用療法を中心に検討されている。併用療法ではVCMの腎毒性や高価格など, 抗菌力以外の問題も重要な因子となるため, 併用の適応を限定する必要がある。

次に耐性機構の問題である。MRSAの主要な耐性機構は*mecA*遺伝子に支配されるPenicillin-binding protein (PBP)2'産生による。しかし, MRSAのPBP2'産生量とβ-ラクタム系抗菌剤に対する耐性度が相関しない株が多く, PBP2'産生はMRSAの必要条件ではあるが, 高度耐性化にはこれ以外の因子も関与している可能性が高い。特にcoagulase negative staphylococciにはPBP2'産生量が少なくともβ-ラクタム系抗菌剤に高度耐性を示す株が多く, MRSA以上に複雑な様相を示している。これらの問題はMRSA感染症の治療剤に求められる特性を考える上で重要であると思われる。

「下痢原性大腸菌研究の最前線」

順天堂大学医学部細菌学教室

山本達男

“たかが下痢”によって幼稚園児が死亡、集団下痢症での溶血性尿毒症候群(HUS)という聞き慣れない名が電波にのって日本中をにぎわせたのは平成2年のことであった。当時我が国でこの病原体(腸管出血性大腸菌, EHEC)を研究していたのは京都大学医学部の竹田美文教授のみで、一部の専門家しか知らない大腸菌下痢症の現状が問題にさえなった。しかしこれは下痢原性大腸菌の本質にかかわる問題とも思われる。EHECは1982年に発見された4番目のカテゴリーの下痢原性大腸菌で、1986年には5番目のカテゴリーである腸管凝集付着性大腸菌(EAggEC)が報告された。6番目の候補がすでにいくつか報告されている。下痢原性大腸菌の変遷は激しい。

下痢原性大腸菌による下痢惹起のメカニズムは、腸管毒素産生、組織侵入、そして細胞骨格障害の3つに大別される傾向がある。また、腸管粘膜への粘着性も重要で、それぞれのカテゴリーが特有の粘着因子をもっている。

粘着性に着目して下痢原性大腸菌を発見あるいは再評価しようという研究の流れがある。1979年にCraviotoらによって開始されたもので、成果はEAggECの発見となって現れた。しかしこの発見には紆余曲折があり、発見当初の名前である腸管付着性大腸菌(EAEC)が世界中のtextbookで使用されてしまった。EAECはEAggECを含んだ複数の粘着様式を示す不均一群を指すもので、現在は“死語”になっている。しかし、一方で、細胞への粘着性を指標にして研究されているすべての下痢症関連大腸菌をまとめてEAECと呼んでしまう研究者もいる。混乱の源には、常に、腸管病原性大腸菌(EPEC)が大きく立ちはだかっている。この混乱の中から、しかし、細胞骨格障害作用(attaching & effacing)、新しい粘着様式(clustered adherence)、アクチンカプセルの概念が明らかになった。この領域での当面の研究課題はEPECを中心に、あるいはEPECと関連して動いていくと思われる。

「緑膿菌との付き合い」

群馬大学医学部薬剤耐性菌実験施設

伊豫部 志津子

緑膿菌感染症が注目され始めたのは、70年代のはじめであり、いわゆる日和見感染症とよばれ難治性であった。ほとんどの抗生剤が緑膿菌には無効であった。80年代から現在に至るまで、緑膿菌をターゲットとして、アミノ配糖体剤、新キノロン剤、第三世代セフェム剤など抗緑膿菌剤が次々と開発されたが、緑膿菌はこれらの薬剤に容易に耐性化した。一方、肺感染患者さんから分離した緑膿菌を調べると、抗生剤に感受性であるにもかかわらず、薬は一向に効かず、抗生剤による治療は無効という例が多くあった。

これらの問題を背景に、緑膿菌の薬剤耐性化、病原性についての研究が進められてきた。緑膿菌の耐性は第一には、その外膜のバリアーとしての特殊性にあり、薬剤の透過性が大腸菌などに比べると悪い。抗緑膿菌剤に耐性化した菌においてはまず外膜蛋白に変化がみられ、薬剤の透過性が低くなっている。第二には薬剤を水解または修飾する不活化酵素の存在である。ある種のアミノ配糖体剤、第一、第二世代のセフェム剤を不活化する酵素は、染色体上の遺伝子にコードされている。新アミノ配糖体剤、第三世代のセフェム剤の不活化酵素をコードする遺伝子は、プラスミドという形で外から取り入れられる。耐性遺伝子の獲得と伝播は、トランスポゾンやインテグロンの構造への組み込みによる。

遺伝学の主役である大腸菌とは異なる特有なくみがみえてくる。耐性化の遺伝的機構にもそれがあった。

化学療法剤の開発がこれほど進んで来ているのに、何故緑膿菌感染症が難治性であるのか。この疑問に答えるのは、現在、着々と明らかになりつつある緑膿菌の菌学的特性であり、緑膿菌とその宿主としての生体とのからみであり、興味深々というところである。これ等の問題を解明しつつ、緑膿菌感染症研究会はこの度29年目を迎えようとしている。

集 会 案 内

- 第15回日本食品微生物学会
日 時：平成6年11月10、11日（木、金）
場 所：福岡勤労青少年文化センター 〒814 福岡市早良区西道2-3-15
☎ 092-851-4511
問合せ先：〒812 福岡市東区箱崎6-10-1
九州大学農学部食糧化学工業科食品衛生化学講座 波多野昌二
☎ 092-632-1962
- 第28回腸炎ビブリオンシンポジウム
日 時：平成6年11月25、26日（金、土）
場 所：昭和薬科大学 〒194 町田市東玉川学園3-3165 ☎ 0427-21-1511
問合せ先：〒194 東京都町田市東玉川学園3-3165
昭和薬科大学微生物学研究室 新井武利
☎ 0427-21-1551 FAX：0427-21-1588
- 第3回腸内フローラ・シンポジウム—腸内フローラと腸内増殖—
日 時：平成6年11月29日（火）10：30～17：10
場 所：ヤクルトホール
問合せ先：〒105 東京都港区東新橋1-1-19
ヤクルト・バイオサイエンス研究財団 ☎ 03-3574-8986
- 第29回緑膿菌感染症研究会
日 時：平成7年1月19、20日（木、金）
場 所：日本都市センター 東京都千代田区平河町2-4-1 ☎ 03-3265-8211
演題締切：平成6年11月12日
問合せ先：〒371 前橋市昭和町3-39-22
群馬大学医学部薬剤耐性菌実験施設 伊豫部志津子
☎ 0272-20-8085 FAX：0272-20-8088
- 第6回日本臨床微生物学会
日 時：平成7年1月21、22日（土、日）
場 所：日本都市センター 東京都千代田区平河町2-4-1 ☎ 03-3265-8211
演題締切：平成6年9月30日
問合せ先：〒113 東京都文京区本郷2-1-1
順天堂大学医学部臨床病理学教室 猪狩 淳
☎ 03-3813-3111 内線5187 FAX：03-3813-0293
- 第10回日本環境感染症学会総会
日 時：平成7年2月18、19日（土、日）
場 所：倉敷市芸文館 倉敷市中央1-18-1 ☎ 086-434-0400
演題締切：平成6年11月5日
問合せ先：〒701-01 倉敷市松島577
川崎医科大学呼吸器内科 二木芳人
☎ 086-462-1111 内線3614 FAX：086-463-6510
- 第25回嫌気性菌感染症研究会
日 時：平成7年2月25日（土）
場 所：順天堂大学有山記念館 東京都文京区本郷2-1-1 ☎ 03-3813-3111
問合せ先：〒136 東京都江東区大島6-8-5
東京都立江東病院 松田静治
☎ 03-3685-2166 内線201 FAX：03-3683-1347
- 第8回臨床微生物迅速診断研究会
日 時：平成7年6月3日（土）
場 所：名古屋市今池ガスビルホール 名古屋市千種区今池1-8-8 ☎ 052-732-3211
問合せ先：〒466 名古屋市昭和区鶴舞町65
名古屋大学病院検査部 一山 智
☎ 052-741-2111 内線235 FAX：052-733-2038

委員会活動総括 組織検討委員会

委員長 笹川千尋

本委員会は、組織の見直しを通じて活力ある支部をつくり、究極的には細菌学会全体の活性化を目標に、島村支部長のもとで3年間活動を行ってきました。その締めくくりとして、本委員会では先日皆様に御配りしたアンケートを企画しました。そのアンケート結果が今回まとまりましたので、御報告をもって本委員会の活動報告に代えさせていただきます。

アンケートでは35項目の質問を行いました。学術委員会は支部総会の現状と支部の活性化について、組織検討委員会は支部評議員会と日本細菌学会について、そして編集委員会は支部ニュースに関する質問を各々作成しました。アンケートは関東支部全会員にお送りしましたが、193名の方からのみ回答を得るに留まり（支部会員全体の約15%）、私共の事前の努力と説明不足を反省しております。しかし頂いたアンケートから、大変建設的かつ率直な提案、異議、あるいは激励を頂くことができました。この場をお借りして、ご協力に厚く御礼申し上げます。

さてここでは組織検討委員会の用意した質問に対する回答をまとめてみますが、紙面の関係上、細部にまでお伝えすることはできません。貴重なご意見とデータ類は、次期評議員会に資料として引継ぎ、具体的な成果となって役立つことを期待します。

まず評議員会活動については、回答者の3分の1が知っているに留まり、会員全体にまだ活動がよく理解されていないようです。特に40代以下の会員にその傾向が強くなります。次に評議員の選挙では毎回投票すると回答した人は約半数にのびりましたが、実際の投票率の低さ（30%前後）から考えますと、本アンケートの回答者に偏りがあると思われる。支部長の現選挙制度は、半数以上の人が現状でよいとしています。一方評議員会活動に対する意見は、活動の理解度が低いのか、25名の意見しか得られません

でした。様々な意見がありましたが、どのようにして、どう変えてゆきたいのか、その具体的な中身と質が問われているように思います。

次に日本細菌学会と総会に関する回答を以下に示します。総会の現状に対しては、意見が分かれました。43%の回答が現状満足と答えています。またそれと全く同数が少し不満足を回答し、現状否定の意見はわずか8%でした。不満な点で目立つのは、シンポジウムのマンネリ化と、総会全体の医学領域への偏重で、100人中24人から指摘がありました。さて一番肝心の学会活性化について、改善すべき上位3点を順に挙げますと、学会誌、総会、理事選挙となります。具体的には学会誌の拡充化、総会発表内容の充実、総会運営の創意工夫、あるいは理事選出方法等に厳しい意見が寄せられました。では総会の活性化の中身として具体的に何を考えるかという問いには、発表内容、討論の充実、他領域との交流、若手の登用、研究レベル向上が上位5つに並びましたが、その他様々な意見に別れ全体のまとまりを欠いています。

最後に関東支部会と日本細菌学会の関係についての問いには、約60%の回答がほぼ現状を肯定していますが、その半数は本部との関係を維持しつつも、関東支部独自のカラーも強めるべきだと述べています。

以上がアンケートのまとめの概要ですが、頂いた意見のなかには、既に学会で具体化されつつあるものもあります。いずれにせよ学会の活性化には、組織の見直しも常に必要ですが、やはりその決めては会員一人一人の力と努力で、それが全体として学会の活力を規定していると思います。総会においては、“聴衆を魅了する発表”と“手ごわい聴衆”の緊張関係こそが、目指すべき姿ではないでしょうか。最後にこの企画とまとめに特に御尽力下さった、池田達夫先生に深謝いたします。

学術集会委員会

委員長 野 沢 龍 嗣

本委員会の活動はすでに前号のニュースで報告した。先日のアンケートのうち、本委員会の活動に関するものの集計を紹介する。約1400通を発送して、193通の回答が寄せられた。その年齢は30～50代が73%であった。この方々は、細菌学会の他に感染症学会(33%)、化学療法学会(20%)、生化学会(16%)、免疫学会(13%)、農芸化学会(12%)、分子生物学会(11%)など1～5つの学会に90%の方が所属している。その内、関東支部総会は55%の方が3位以上に重要視している事が分かった。支部総会には67%の方が時々参加しており、一度も参加した事がない人は14%であった。

参加の動機は半数の方がプログラムへの興味であった。支部総会は現在春・秋2回開催されているが現在そのまま(46%)、1回でよい(52%)とほぼ拮抗していた。開催形式は現在シンポジウムと一般演題の両方とも行なわれているが、このままの形式で良いが85%、変更するが15%であった。変更する場合、一般演題は本部総会で発表し、支部総会はシンポジウムだけで良いという意見もあった(13名)。

シンポジウムのテーマの決め方について、現在そのまま(総会長が決める)が42%、会員から公募(26%)、評議員会の意見を取り入れるが31%であった。支部総会に期待するものでは、討論(40%)、独創性(34%)、親睦(19%)の順で、独創性のある発表に対して熱い討論がなされる姿を求める方が圧倒的であった。

その他の期待では、時間をかけた討論、若手研究者の積極的な参加への期待、ワークショップや勉強会、研究者の接触、交流の場との意見もあった。

次に、総会のやり方などについての具体的な質問についての回答であるが、過去の総会の良かった点については66%が回答なしであった。2/3が時々しか出席していない現

状では不適當な質問であった。懇親会についての要望も回答なしが80%であった。親睦のために行なう手段としては半数の方から回答があり、学術ビデオの放映(61%)、スポーツ(12%)、遠足(7%)などであった。優秀演題に賞を出す質問に対して95%の回答があり、賛成(53%)、反対(17%)、どちらでも(24%)であった。これは私見ですが、国際学会の演題募集パンフレットに優秀発表に無料でバンジージャンプが出来る賞をだすというのがあったが、こんな気楽な賞がでる総会だと大変楽しいのではないのでしょうか。最後に、支部総会全般に対する意見を挙げておきます。

紙面の都合でグラフや表にまとめたものが示せないのが残念であるが、また別の機会もあるのではないかと思う。この資料を今後の支部総会や評議員会で大いに参考にして頂ければ幸いである。最後に、多数の会員の皆様アンケートに参加して頂いた事に深く感謝します。

「支部総会の運営について」

- ・評議員会の活動が外部に見えていない。
- ・大学関係以外の製薬企業研究所や検査室関係の会員を呼び戻す企画が必要である。
- ・積極的に他学会との連携を計り、非会員が参加しやすい環境を準備してはどうか。
- ・支部の運営は大学関係者および大きな研究所関係者だけで運営している。
- ・会員の中には会社関係者も大勢いるので、これらの人達も評議員会に出られるような選挙を考えて欲しい。
- ・参加費の容易な値上げは認められない。
- ・一部の人によって運営されている支部会には魅力がない。
- ・支部総会長は退職記念のために選ばれている雰囲気がある。
- ・支部総会の将来よりも個人の名誉欲に走る傾向がある。

- 日本細菌学会に入会すれば自動的にどこかの支部会に入会するようになっている方式をやめる。
- 40才以下の全員の発表論文を細菌学雑誌, Microbiol. Immunol.の中から選び, Best papers of the yearを総会で表彰する。

「支部総会の形式・企画について」

- 支部総会の年2回開催は多い。
- 支部総会はマンネリ化している。
- 他学会と合同で開催する(親睦会も)。
- 総会の発表内容が臨床細菌から次第に離れていく傾向がある。
- 本部総会のミニ版とならないように独自性を出す。
- 若い研究者が発表しやすい学会にする。
- 参加しやすいムードを作りたい。
- 応用研究分野の発表にも力を入れて欲しい。
- 地方から参加しやすいように, 開催日を土・日にして欲しい。
- 関東支部は大きいため本部総会との二重写しを避ける意味で, 違いを出すために解説的教育の場にする。
- 細菌学会は医細菌学会であるので, 食品微生物, 農芸(発酵)微生物, 公衆微生物, 抗生物質産生微生物などは別学会を作ってはどうか。
- 一般的な細菌と医細菌を春総会, 秋総会に分けるのも良いのでは。
- 年1回にして内容(テーマ)をしぼった方式で行って欲しい。
- 非会員が興味を持つようなプログラムを作成, 非会員の参加を増やす。また, プログラムを他学会誌に掲載してもらう。
- 支部総会では顔触れも固定し, マンネリ化の傾向が強くなっているため, それを打破できるような独創的シンポジウムや特別講演が望ましい。

事業計画委員会

委員長 辨野 義己

本委員会は島村支部長のもとで新設された委員会で, 委員は井上松久, 内山竹彦, 金森政人, 北野繁雄の諸氏と私で構成されております。本委員会の主な任務は会員の意見をもとにしてこれからの支部における新規事業を計画・提案することです。なお, 本委員会の委員長は平成5年度より交代いたしました。今回の委員会では北野前委員長が出された事業計画案(支部ニュース第18号)や新たに各委員より出された意見がまとめられました。以下のような提案がその内容です。①講習会を開催して, 会員の学術レベルの向上を図り, 出席者には証明書を出す。②研究費の紹介や斡旋を行なうのもよい。③職の紹介を行なう。④学会内で推進すべき研究テーマを創り, 研究者を募集し, 僅かでも研究費を出す。⑤教育的要素を多く含んだ学会内容にしてみる。⑥共同研究を推進する橋渡しの役割を持つ, などの意見が出されました。これらをいかに具体化させるか, 道程は遠いようですが, 今回集計されました会員のアンケートをみましても, 支部として様々な講習会を開催して, 会員の学術レベルの向上に貢献して欲しいという強い意見があります。さらに, 支部会の目的として, 会員の学術レベルの向上を図り, 研究・教育活動を支援するとあります。この目的にそって支部における新規事業を実施することが大切であるとの認識に立っております。会員が今, 何を求めているのか。また, 将来の細菌学会, 支部会のありかたなどじっくり話し合う場を設ける必要があるように思います。現状の枠に囚われることなく, 新しい試みも求められているようです。アメリカ細菌学会(ASM)は年々盛況と聞きます。分散型ではなく, その場に行けばあらゆる細菌学の顔が見られるからでしょうか。確かに, 現在の学会に期待するのは難しいかもしれませんが, 将来の支部, 総会などの機能を考える上で示唆に富んだ内容やシステムがあるものと思われれます。

<集会報告>

第10回「細菌の病原性とその分子生物学」研究会が、平成6年7月22日国立予防衛生研究所共有第一会議室にて13時から15時半まで開催された(名簿に記載した人は85名であったが、実際は100名以上が席を埋めていた)。テーマとして病原性遺伝子の発現調節—その感染における意義をめざして—と題して、一般演題7題、特別講演1題が発表された。一般演題は演者として30代の若い人をお願いし、種々の菌の病原性に関与している遺伝子の発現調節に関し、pH、CO₂などの外界環境因子を感知し、それがどのような発現調節につながっていくのかという道筋につながる発表がなされ、活発なる討論を巻き起こした。近い将来に感染の場における遺伝子発現がテーマになることが期待された。若い人たちが発表し活発なる討論をできる機会が増えることによって細菌学関連の活性化も自ずと達成できると感じられた。特別講演として遺伝研の石浜明先生が「原核生物の転写制御」と題して、大腸菌全体の転写の活性化を質的および量的に測定できる系の構築をめざす研究を紹介され、聴衆全員がそのダイナミックさに感嘆していた。

議 事 録

第9回評議員会

日時：1994年1月29日(金)、14時～17時
場所：昭和大学病院入院棟17階第二会議室
主席者：新井俊彦、五十嵐英夫、池田達夫、井上松久、内山竹彦、岡村 登、奥田克爾、金森政人、河野 恵、笹川千尋、島田俊雄、竹田多恵、檀原宏文、野沢龍嗣、辨野義己、吉田孝人(第72回総会長) 島村忠勝(支部長)、江川 清、戸田真佐子(幹事)
欠席者：伊豫部志津子、北野繁雄、黒坂公生、鶴 純明、三上 聖、光岡知足

議題：

1. 第71回総会準備状況報告

工藤総会長欠席のため、五十嵐氏より説明。

2. 第71回総会準備状況報告

吉田総会長より準備状況報告。

日時：平成6年11月10日(水)、11日(木)
会場：遠鉄ホテルエンパイア(浜名湖館山寺温泉)

会費：一泊二食付きで、宿泊者は会費込みの宿泊料金とする。

第一日目は一般演題、特別講演、シンポジウム1と評議員会、第二日目は一般演題、シンポジウム2と会務総会を予定している。

3. 第73回、74回総会長の選出

候補者を推薦し、その中から二名連記で投票を行なった結果、新井俊彦氏(明治薬科大学微生物学教室)および三瀬勝利氏(国立衛生試験所)に決定した。

4. 選挙管理委員の選出

選挙細則にのっとり支部長より委員長に光岡氏が、委員に五十嵐氏、池田氏、島田氏、竹田氏が推薦され承認された。光岡氏欠席のため、後日交渉の結果、7月は学会出張で不在とのことで委員長は河野氏に変更となった。

5. 小委員会報告

(1) 編集委員会

4つの委員会の3年間の総括および次期委員への申し送りを含めて小委員会報告を支部ニュースに掲載する。

(2) 学術委員会

アンケートに関する件

(3) 事業計画委員会

アンケートに関する件

(4) 組織検討委員会

アンケートに関する件

6. 第8回評議員会議事録の承認

7. その他

(1) 柳原保武氏(静岡県立大)よりライム病国際シンポジウムを関東支部の協賛(サテライトシンポジウム)としてほしいとの要望があり、討論の末、承認された。

(2) 名誉/功労会員については次期評議員会に申し送ることとなった。

(3) アンケートについて笹川氏より原案作

成経過が説明され、討論・修正、第71回総会プログラムに同封して会員に送付することになった。

第10回評議員会

日時：1994年5月21日(土)、14時～17時

場所：昭和大学病院入院棟17階第二会議室

主席者：新井俊彦、五十嵐英夫、井上松久、伊豫部志津子、内山竹彦、奥田克爾、金森政人、黒坂公生、笹川千尋、島田俊雄、竹田多恵、植原宏文、鶴純明、野沢龍嗣、辨野義己、三上聖、光岡知足、吉田孝人(第72回総会長)、島村忠勝(支部長)、江川 清、戸田真佐子(幹事)

欠席者：池田達夫、岡村 登、北野繁雄、河野 恵

議題：

1. 第72回総会準備状況報告
プログラムは支部ニュースと一緒に9月初めに発送予定。
2. 会計監査員選出
支部長より黒坂氏と岡村氏が推薦され、全員一致で承認された。
3. 小委員会報告
 - (1) 編集委員会新井委員長より支部ニュース発行に関する説明。新評議員選挙の結果は特別号。
 - (2) 学術委員会野沢委員長よりアンケートの整理状況の報告。
 - (3) 組織委員会
笹川委員長よりアンケート発送までの経過について報告。結果は支部ニュース第22号に掲載予定。
 - (4) 事業計画委員会辨野委員長より支部の今後の在り方をまとめるとの意向が示された。
4. その他
 - (1) 第73回三瀬総会長よりシンポジウムのテーマに関する評議員会の意見を伺いたいとの要望があった。新旧評議員会までに考えておくこととなった。
 - (2) アンケートは125通回収され整理中。

<人事消息>

小沢 敦先生 東海大学医学部感染症学教室を定年退職。名誉教授。

黒坂公生先生 東京慈恵会医科大学臨床検査医学を定年退職。名誉教授。

青木 宙先生 東京水産大学資源育成学科学道伝生化学講座教授に就任。宮崎大学農学部水産衛生学講座教授より転任。

熊沢義雄先生 北里大学理学部生体防衛学講座教授に就任。同大学薬学部生物薬品製造学講座講師より昇任。

竹田美文先生 国立国際医療センター研究所長に就任。京都大学医学部微生物学講座教授兼任。

<訃報>

田所一郎先生 元横浜市立大学医学部教授(75才)平成6年8月15日急性心不全のため逝去

御自宅：〒248 鎌倉市二階堂267-39

☎0467-24-8946

◇編集後記◇

今回はいよいよ最終の号となった。評議員選挙報告、アンケートの集計、各小委員会の活動報告が重要な記事となった。また、フォーラムには先端的な研究情報を4編も寄稿頂くことができた。当編集委員会が発行する全6回の支部ニュースの最終を飾るものとして満足な記事を集録できた一同喜んでいる。当編集委員会へのアンケート結果は、紙面の都合で次号に掲載するが、本誌の存在価値を再認識させてくれるご意見であった。(T. T.)

日本細菌学会
関東支部ニュース
第22号

(1994.9.30)

発行：日本細菌学会関東支部
〒142 東京都品川区旗の台1-5-8
昭和大学医学部細菌学教室内
☎03-3784-8131
